

調査実践報告

## 新潟市におけるひとり暮らし高齢者の生活の 基本的特徴について －生活保護受給世帯の調査から－

A Survey on Lives of the Elderly Living Alone in Niigata-city  
Receiving the Public Assistance

小澤 薫\*

OZAWA Kaoru

### 1 はじめに

本調査の目的は、新潟市におけるひとり暮らし高齢者の生活実態と意識の把握を通じて、生活保護費の20%にも及ぶ老齢加算の廃止が（新潟市は2級地-1で16,680円）、高齢者の生活に与えている影響について検討するための基礎資料を得ることである。

昨今、最低生計費の試算が示されている。金澤誠一を監修責任者とする労働総研の調査チームによる最低生計費試算は、首都圏、東北、静岡などで実施され、「マーケットバスケット方式」を採用してそれぞれの地域における最低生計費が示されている。これによると地域によって生活の内容は異なっても総額としては、ほぼ同じ生活水準であることがわかる。貧困研究会・家計調査部会による最低生計費試算は、「低所得世帯の家計と生活実態を十分把握した上で、今日の日本の最低生活費としてふさわしいモデルを抽出し、その最低生活費を試算」するとして理論生活費の算定が行われている。政府は2009年12月に「ナショナルミニマム研究会」を設置して、「国民に納得され、安心感を与えるナショナルミニマムの確立」の重要性を確認している。国民の生活の安定にとって最低生活費は、大きな意味を持っている。加えて、高齢化、単身化が進む社会状況における地域の課題について、「社会的孤立」を視点にした検討が進められている。河合克義は、高齢者の生活実態と社会的孤立に関する調査を港区、葛飾区、横浜市鶴見区、君津市などで実施してきた。

---

\* 新潟県立大学人間生活学部 (ozawak@unii.ac.jp)

このような先行研究を受け、本調査は、ひとり暮らし高齢者の「最低生活」について、生活保護受給者の社会関係や食習慣などの生活実態や意識を通してみていきたい。

## 2 調査の概要

### ・調査の方法

調査主体は、新潟県立大学小澤研究室である。なお「新潟生活と健康を守る会」の全面的協力を得た。

### ・調査対象

「新潟生活と健康を守る会」の会員で、生活保護を受給している70才以上の単身高齢者である。

### ・調査時期

2010年7月から8月である。

### ・調査の方法

調査員による訪問面接調査とした。対象者の希望によって、自宅以外でも行った。調査員は、教員・学生と「新潟生活と健康を守る会」の役員と同会の支援者である。教員・学生と支援者が2人1組になって聞き取りをした。

新潟市で生活保護を受給している70歳以上の単身の会員29人のうち、実際に訪問調査ができたのは、28ケースであった（聞き取り調査の一覧は表1の通りである）。

なお新潟市の保護率は（2008年）10.24%で、全国よりは低い数値となっている（全国12.5%）。しかし、区別にみると東区17.34%、中央区13.74%と、地域によって状況が異なることがわかる。また、ひとり暮らし高齢者の出現率をみると（ひとり暮らし高齢者世帯÷高齢者のいる世帯数）、新潟市は26.1%であるが（2009年）、中央区は35.8%と市よりも10ポイント高くなっている。生活保護基準は、新潟市内は2級地-1で区による違いはなく、生活扶助基準額は（2010年度）、70歳以上の場合は第1類が29,430円、第2類が39,520円（単身）である。これに冬季加算15,480円（単身）が11月から3月までの期間加算され、住宅扶助は35,500円以内になっている。これらの合計が生活保護費となり、基本的には第1類と第2類を合計した生活扶助費68,950円が世帯の生計費の基準となる。

表1 調査対象者一覧表

No	性別	年齢	健康	介助の有 無	住宅形態	家賃	住宅の困り ごと	単身期間 (年)	ひとりきっか け※	子ども有 無	行き来のある 親族	お正月	緊急時の支 援者の有無	冠婚葬祭	経済状況	最長職	BMI
1	女性	84	あまり	一部介助	民間借家	¥35,000	ある	13	死別	いる	いない	ひとり	いる	あまり	余裕はない	自営業	28.1
2	女性	83	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥25,000	なし	68	自立	いない	いない	誰かと	いない	あまり	かなり苦しい	非正規	20.0
3	男性	83	あまり	自分で	公営住宅	¥5,000	ある	83	自立	いない	いない	ひとり	いる	時々参加	余裕はない	正社員	23.9
4	女性	82	あまり	自分で	民間借家	¥32,000	なし	40	離婚	いる	子ども	ひとり	いない	いつも参加	余裕はない	正社員	23.6
5	女性	82	あまり	一部介助	公営住宅	¥23,400	なし	10	死別	いる	子ども	ひとり	いる	参加しない	かなり苦しい	自営業	25.3
6	女性	81	まあまあ健康	すべて介助	民間借家	¥30,000	ある	30	死別	いる	子ども	ひとり	いる	参加しない	かなり苦しい	非正規	21.7
7	男性	79	健康ではない	自分で	民間借家	¥35,000	なし	41	離婚	いる	子ども	ひとり	いる	いつも参加	余裕はない	非正規	24.8
8	男性	78	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥20,000	ある	19	離婚	いる	いない	誰かと	いる	参加しない	やや苦しい	正社員	26.6
9	男性	77	まあまあ健康	一部介助	民間借家	¥30,000	なし	20	別居	いる	いない	ひとり	いる	時々参加	かなり苦しい	非正規	22.3
10	女性	77	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥38,000	ある	6	死別	いる	きょうだい	誰かと	いない	いつも参加	やや苦しい	非正規	21.1
11	男性	76	あまり	自分で	民間借家	¥27,000	ある	40	死別	いる	きょうだい	ひとり	いる	いつも参加	やや苦しい	正社員	22.6
12	女性	76	健康ではない	自分で	民間借家	¥36,000	ある	1	死別	いる	いない	ひとり	いない	参加しない	余裕はない	正社員	26.0
13	男性	75	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥35,000	ある	8	離婚	いる	きょうだい	誰かと	いる	参加しない	かなり苦しい	非正規	21.2
14	女性	75	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥35,500	ある	28	離婚	いる	きょうだい	誰かと	いる	あまり	余裕はない	非正規	20.8
15	女性	74	あまり	自分で	民間借家	¥35,000	ある	2	その他	いない	親戚	ひとり	いない	いつも参加	やや苦しい	自営業	22.1
16	女性	74	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥25,000	ある	18	死別	いる	子ども	誰かと	いる	いつも参加	やや苦しい	非正規	18.8
17	女性	73	あまり	自分で	民間借家	¥38,000	ある	15	離婚	いる	子ども	誰かと	いる	時々参加	かなり苦しい	自営業	32.4
18	女性	73	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥35,300	なし	4	子の独立	いる	きょうだい	誰かと	いない	参加しない	かなり苦しい	非正規	23.6
19	女性	73	非常に健康	自分で	民間借家	¥55,000	なし	30	離婚	いない	きょうだい	誰かと	いる	あまり	かなり苦しい	非正規	18.9
20	女性	73	あまり	一部介助	持ち家	¥30,000	なし	6	子の独立	いる	子ども	誰かと	いる	いつも参加	かなり苦しい	自営業	18.9
21	男性	72	あまり	一部介助	公営住宅	¥6,000	ある	36	死別	いる	いない	ひとり	いる	NA	かなり苦しい	非正規	19.7
22	女性	72	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥37,000	ある	9	離婚	いる	いない	ひとり	いない	NA	余裕はない	正社員	16.2
23	男性	72	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥35,000	ある	20	親との死別	いない	きょうだい	ひとり	いない	時々参加	やや苦しい	自営業	25.0
24	女性	71	健康ではない	一部介助	持ち家	なし	ある	9	離婚	いない	いない	誰かと	いる	参加しない	かなり苦しい	自営業	29.9
25	女性	71	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥35,500	なし	3	死別	いる	子ども	誰かと	いる	あまり	やや苦しい	自営業	24.5
26	女性	70	健康ではない	自分で	公営住宅	¥24,700	ある	3	死別	いる	子ども	ひとり	いる	あまり	やや苦しい	非正規	29.1
27	男性	70	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥35,500	ある	17	離婚	いる	きょうだい	ひとり	いる	参加しない	やや苦しい	正社員	20.2
28	男性	70	まあまあ健康	自分で	民間借家	¥25,000	ある	32	離婚	いる	いない	誰かと	いる	時々参加	やや苦しい	正社員	24.2

※「ひとりきっかけ」の「死別」は、「配偶者との死別」

### 3 調査結果

#### 3-1 基本属性

##### (1) 性別・年齢

男性10人（35.8%）、女性18人（64.3%）であった。年齢は、「70～74歳」14人（50.0%）、「75～79歳」8人（28.6%）、「80歳以上」6人（21.4%）であった。

##### (2) 住まいについて

居住年数は、「20年以上」が12人（42.9%）と全体の4割を占め、ついで「10～20年」6人（21.4%）となっている。50年以上居住している人も2人いた。10年未満は10人。住居の状況は、「民間借家」22人（78.6%）、「市営県営住宅」4人（14.3%）、「持ち家」2人（7.1%）であった。家賃は、「市営県営住宅」で1万円未満が2人で5千円と6千円、2万円台が2人で23,400円と24,700円であった（表2）。「民間借家」は、2万円台が5人、3万円台16人であった。1人は55,000円であるが、これは1階部分を店舗にして飲食店を経営している。

表2 居住形態×家賃

居住形態	なし	1万円未満	2万円台	3万円台	4万円以上	合計
持ち家	1 50.0%			1 50.0%		2 100.0%
市営県営住宅		2 50.0%	2 50.0%			4 100.0%
民間借家			5 22.7%	16 72.7%	1 4.5%	22 100.0%
合計	1 3.6%	2 7.1%	7 25.0%	17 60.7%	1 3.6%	28 100.0%

##### (3) ひとり暮らし期間

ひとり暮らしの年数については、「20年以上」が12人（42.9%）、「10～20年」が6人（21.4%）であった。ひとり暮らしになった理由をみると、「離婚」が一番多く11人（39.3%）、次いで「配偶者の死亡」が10人（35.7%）であった。「離婚」が4割近くを占めている。

##### (4) 仕事について

本人の最長職は、「非正規雇用」が多く12人（42.9%）、「民間企業の正社員」と「自営業」はともに8人（28.6%）であった。職業分類でみると、「小商業」8人、「サービス業従事」7人、「単純労働者」5人であった。具体的には、「飲み屋・スナック」が7人であった。

### (5) 健康状態・介護について

主観的な健康状態については、「まあまあ健康」が14人で半数を占めているが、「あまり健康ではない」が9人(32.1%)、「健康ではない」4人(14.3%)で、あまり健康ではない方も半数近くいる。そこで通院の状況をみると、22人(78.6%)が何らかの病院・診療所に定期的に通院していた。

介助については、「自分でできる」が20人(71.4%)いるが、一部もしくはすべて介助を必要としている方が8人(28.6%)であった。この8人はみなデイサービスやホームヘルパーなど介護保険制度を利用している。

## 3-2 日常生活について

### (1) 外出について

「毎日1回以上」が14人(50.0%)、「2,3日に1回」が11人(39.3%)であった。「週に1回以下」は3人で、外出していない理由は、3人とも「健康上の心配が大きい」ことを挙げていた。なお、この3人は介護保険のサービスを利用していない。

### (2) 買い物について

ふだんよく買い物するのは「スーパー」21人(75.0%)、その他「コンビニ」「個人商店」は2人ずつ、「100均」が1人であった。買い物に行くための手段は、「徒歩」が12人(46.2%)、「自転車」が10人(38.5%)であった。その他「病院の行き来に利用するタクシーに立ち寄ってもらう」や「友達の車に乗せてもらう」という回答があった。買い物に行くための手段が「徒歩」の場合は、お店までの距離が500メートル以内で(表3)、時間も10分以内が11人(91.7%)であった。自転車の場合は、1キロを超える人が3人(30.0%)、時間で10分以上が4人(40.0%)であった。

移動の手段について、通院の場合をみると、バスが8人、タクシーが6人で、徒歩は1人だけであった。移動の範囲が通院で広くなることがわかる。ただ移送費が支給されるとはいえ、急な場合は、立て替え払いになるので、ある程度の現金を持っている必要があり、実際に、そのために保護費を蓄えている人がいた。

表3 買い物の手段×距離

手段	買い物先までの距離(m)									合計
	100	200	300	400	500	700	1000	1500	8000	
徒歩	2 16.7%	2 16.7%	3 25.0%	1 8.3%	3 25.0%		1 8.3%			12 100.0%
自転車	1 10.0%		2 20.0%		2 20.0%	2 20.0%	2 20.0%	1 10.0%		10 100.0%
その他					1 33.3%		1 33.3%		1 33.3%	3 100.0%
合計	3 12.0%	2 8.0%	5 20.0%	1 4.0%	6 24.0%	2 8.0%	4 16.0%	1 4.0%	1 4.0%	25 100.0%

※無回答は欠損値として集計

### (3) 食生活について

「3食きちんと食べている」が20人（71.4%）、「2食が習慣になっている」が7人（25.0%）。主に食事を「自分」で用意するのは23人（82.1%）で、8割以上の人が自炊をしていた。

なお、ここでは、簡易自己式食事歴質問票（BDHQ）による調査も行った。全体のうち、回答の信頼度が高い21ケースについて、1000kcalあたりの推定摂取量を算出した（表4）。「日本人の食事摂取基準」に基づいて主要な栄養素をみると、調査対象者全体の平均値としては、極端に偏った項目はなかった。

表4 1000kcalあたりの推定食事摂取量

		total	
		n	= 21
年齢	歳	76.2	± 4.73
身長	cm	156.2	± 8.36
体重	kg	55.5	± 8.87
エネルギー	kcal	1000	± 0.00
食事エネルギー密度	g/kcal	1.42	± 0.37
たんぱく質	%E	13.8	± 3.50
動物性たんぱく質	%E	6.9	± 3.60
植物性たんぱく質	%E	6.9	± 0.90
脂質	%E	24.8	± 6.19
動物性脂質	%E	10.0	± 4.81
植物性脂質	%E	14.9	± 4.00
炭水化物	%E	57.4	± 8.62

注) 値は平均±標準偏差を示す。

飲酒の習慣については、「飲まない」が14人 (50.0%)、次いで「毎日」が5人 (17.9%) であった。これは性別で異なり、男性は「毎日」が5人 (50.0%)、女性は「飲まない」が66.7%であり、性別によって異なっていることがわかる (表5)。

表5 性別×飲酒の習慣

性別	毎日	週に4～6回	週に2～3回	週に1回もしくはそれ未満	飲まない	合計
男	5 50.0%	1 10.0%	1 10.0%	1 10.0%	2 20.0%	10 100.0%
女			3 16.7%	3 16.7%	12 66.7%	18 100.0%
合計	5 17.9%	1 3.6%	4 14.3%	4 14.3%	14 50.0%	28 100.0%

#### (4) 入浴について

「毎日」12人 (42.9%)、「1日おき」6人 (21.4%) であった。「週1回程度」が2人いて、この2人の入浴は市から支給される「入浴券」の枚数のみとなっている。

### 3-3 住居・日常生活の困りごとについて

#### (1) 住居に関する困りごと

住居に関する困りごとがあると回答した者は、19人 (67.9%) であった。困りごとの内容 (複数回答) で最も多かったのは「家が老朽化している」で10人 (57.6%)、ついで「階段の昇り降りが大変」であった。その他の具体的な回答をみると、「冬は寒い」「サッシがしまらず雪が入ってくる」「雨漏りがする」など修繕を必要とする回答、「隣が近くて窓が開けられない」「日当たりが悪い」など住環境に関する回答があった。さらに、自宅に「お風呂がない」のは5人 (17.9%) で、お風呂があっても「段差があって入れない」など自宅の風呂を利用していない、できない人が2人いた。入浴券が支給されても「銭湯まで徒歩で30分以上かかるのでいけない」という声もあった。

#### (2) 雪で困ったこと

2009年度、新潟市は大雪に見舞われ、雪で困ったことが「ある」という回答が18人 (64.3%) であった。困ったこととして、「雪かき」「ゴミ捨て」「買い物」があった。そのほか具体的な内容として「玄関前に雪がたまっていて、タクシーに乗るにも、デイサービスに行くにも大変だった」「誰も雪かきをしないので自分で雪かきをした」「4日間バスが通らなかった」「雪で転んで腰

を痛めてしまった」「戸が開かなくなった」「雪かきは近所の人がやってくれたが外にでるのが困った」「坂の上に家があるので、坂をくだって買い物に行くのが大変だった」など切実な声が挙げられていた。「ない」と回答した人については、「近所の人雪かきをしてくれたから」という周りの人がやってくれたからという回答や「元気なので雪を踏み越えて出入りした」「いまはまだ身体が丈夫なのでなんとかできた」などいまは元気だからという回答があった。

### (3) 日常生活の困りごとの支援について

日常生活で困ったときに誰に手伝ってもらおうか尋ねたところ（複数回答）、「子ども」が11人（39.3%）と最も多く、次いで「近所の人」が8人（28.6%）、「友人・知人」が7人（25.0%）であった。地域の人や専門家としては、「民生委員」「自治会長」「ホームヘルパー」「役所の人」なども挙がっていた。その一方で、「手伝ってもらう人がいない」は5人（17.9%）であった（表6）。

表6 困りごとを手伝ってもらう人（複数回答）

困りごとを手伝ってもらう人 (n=28)	実数	%
子ども	11	39.3%
きょうだい	3	10.7%
親戚	1	3.6%
近所の人	8	28.6%
友人・知人	7	25.0%
民生委員	3	10.7%
自治会長	1	3.6%
ホームヘルパー	4	14.3%
役所の人	2	7.1%
病院の人	1	3.6%
ケアマネージャー	1	3.6%
手伝ってもらう人がいない	5	17.9%
その他	5	17.9%



### 3-4 家族・親族関係について

#### (1) 生存子の有無について

子どもがいる方は22人 (78.6%) で、いない方は6人 (21.4%) であった。子どもの数をみると、「1人」が9人 (40.9%)、「2人」が5人 (22.7%)、「3人以上」が8人 (36.3%) であった。なお、未婚者は3人 (10.7%) であった。

#### (2) 最も行き来のある家族・親族

「子ども」が9人 (32.1%)、「きょうだい」が8人 (28.6%) であるが、「誰ともほとんど行き来がない」が10人 (35.7%) であった。最も行き来のある方と電話やメールなどで連絡を取り合う頻度は、「ほとんど毎日」が6人、「週に数回」2人、「月に数回」6人、「年に数回」4人であった。また、子どもがいる方であっても、「誰ともほとんど行き来がない」と回答する人が7人いた。

### 3-5 社会関係について

#### (1) ふだんの会話の頻度

「毎日」が18人 (64.3%) で、6割以上が毎日誰かと会話をしている。「ほとんど会話をしない」は2人だった。主に会話をされる方は、「友人・知人」が12人、「近所の人」が7人で、親族よりも、「友人・知人」「近所の人」の方が多かった。

#### (2) 生活上の楽しみ

生活上の楽しみの有無では、「ある」が22人 (78.6%)、「ない」が5人 (17.9%) であった。楽しみとして「NHKのど自慢にでたい」「カセットをかけて歌う」など歌を歌うことや「花火大会や日本海ライブ」「演芸場に行くこと」などイベントに参加したり文化に触れること、「読書」「昔、自分が描いた絵を見ること」「釣り」「植木の成長」「銭湯でのんびりすること」などの趣味にかかわるものが挙げられていた。「水戸黄門や韓国ドラマなどTVを観ること」などテレビ鑑賞も挙げられていた。また、「孫の成長」「娘、孫の顔をみること」など家族との関係、「友人と月1回外食をしておしゃべりすること」「友人のところに遊びに行くこと」など友人との関係も挙げられていた。その他、「料理を作ること」「お酒を飲むこと」などがあつた。

#### (3) 社会参加活動について

これは、地域組織や趣味のグループなど社会団体・集まりへの参加状況を尋ねたものである (複数回答)。趣味が8人、社会活動5人、学習会3人、老人会3人、宗教団体などでの活動2人であった。また、「活動・参加したものはな

い」は11人で、4割近くの方が、現在参加してない。不参加の理由については、10人が回答していて（複数回答）、「身体の調子が悪い」が5人、「費用がかかる」が4人であった。

#### （4）お正月の習慣について

これは、お正月の習慣について尋ねたものである（複数回答）。「年賀状のやりとりをする」15人、「雑煮を食べる」14人、「おせち料理を食べる」13人、「松飾りや鏡餅などのお飾りをする」11人、「初詣に行く」10人で、多くの方が正月をしていた。そのなかで「お年玉をあげる」は4人だけであった。また、2010年の正月三が日の過ごし方を尋ねたところ（複数回答）、一番多かったのは「ひとりで過ごした」14人（50.0%）であった。

#### （5）緊急時の援助者について

病気や身体の不調などの緊急時に支援してくれる人の有無については、「いる」20人（71.4%）、「いない」8人（28.6%）。さらに、緊急時の支援者が「いる」と回答した人について、その相手は誰かをみると、「子ども」9人、「きょうだい」3人、「近所の人」3人、「友人・知人」2人であった。

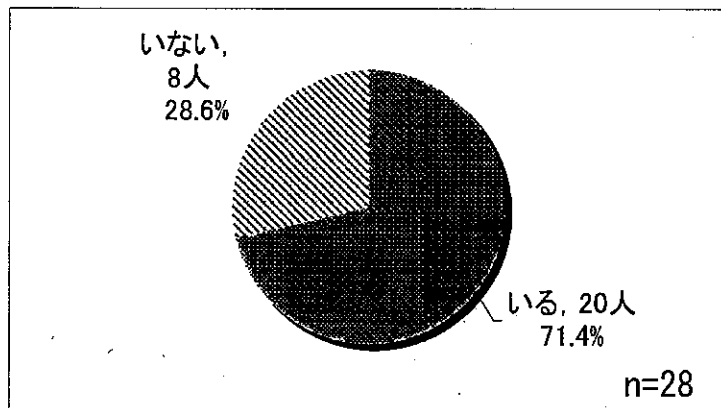


図1 緊急時の支援者の有無

### 3-6 経済状況について

#### （1）生活保護の受給期間

「4年未満」が11人（39.3%）、「5～9年」10人（35.7%）、「10年以上」7人（25.0%）であった。5年以上受給している方が、6割を超えていた。

#### （2）経済状況についての意識

自分の現在の経済状況についての意識を聞いたところ、「かなり苦しい」が11人（39.3%）、「やや苦しい」が10人（35.7%）、「余裕がないが生活していくには困らない」が7人（25.0%）であった。「かなり苦しい」と「やや苦

しい」をあわせると75.0%で、生活保護を受給していても4分の3が経済状況は苦しいと回答している。

### (3) 支出の状況について

洋服の購入頻度は、「ほとんど購入していない」が26人(92.9%)で、下着でさえ「ここ数年新しいものを購入していない」が9人(32.1%)で、購入していても「年に1枚から2枚」が13人(46.4%)にのぼっている。泊まりがけの旅行について尋ねたところ、「全くしてない」と「ほとんどしない」をあわせると25人(89.2%)で、ほぼ9割の人が泊まりがけの旅行をしていない。また、冠婚葬祭への参加については、「まったく参加していない」8人、「あまり参加していない」6人で、これらをあせると14人で、半分の人が参加できていないことがわかる。その一方で「いつも参加している」が7人、「時々参加している」が5人いる。お宅でのお中元やお歳暮などのプレゼントのやりとりについても、「まったくしていない」19人(67.9%)で、7割近くがプレゼントのやりとりをしていない。このように、日常生活を送るための被服費にお金をかけておらず、余暇活動や趣味としての「旅行」もほとんど行っている人がいない。さらに、社会的なつながりである「冠婚葬祭」にあまり参加できていない人が多い。

### (4) 家計の中での負担費目と不安について

家計費の中で負担に感じている費目について尋ねたところ、「光熱費」が多く8人、次いで「食費」が6人、「交通費」が3人であった。さらに節約している費目については、「食費」が19人、「光熱費」が13人、「被服費」が6人であった。実際、訪問面接調査を実施した時期は猛暑のまただ中にも関わらず、エアコンを使用しているお宅は少なく、エアコンがあっても故障をしていたり、ふだんは扇風機さえも使用を制限している状況があった。また、お風呂のお湯の替える頻度では、1週間に1回以下の方も2人いた。水道光熱費を節約するために、支給される「入浴券」だけで、入浴は1週間に1回という方もいた。

さらに、日常生活を送る上で、不安なことを尋ねた(複数回答)。そのなかで「お金のこと」が17人(60.7%)で6割以上のお金について日々不安に思っており、次いで「健康のこと」13人(46.4%)であった。具体的な記述をみると、「漠然とお金が少ないことへの不安がある」「もう少し手元にお金があるだけで安心になる」「生活保護費が少なくなった」「上下水道代が高くなった」「孫、自分の服が買えない」「親族がなくなったときに香典がだせなかった」などお金に関することが多く挙げられていた。お金に関する具体的な対応策としては、「出費を抑えて節約をする」「貯金ができなくなったので、

新聞を止めた」「考えてももらうお金が少なく、蓄えもできない」という回答がみられた。その他、「健康」に関連して、ひとりで亡くなることへの不安が多く、「子どもや大家に迷惑をかけてしまうのではないか」、「ひとりなので病気になって倒れたらと思うと不安」というものがあった。

#### 4 調査結果からいえること

本調査によって明らかになったことは、生活保護を受給しているにもかかわらず、多くの人が経済的な不安を抱えていることであった。「友人との月1回の外食」、「緊急時の移送費」、「冠婚葬祭費」などに備えて光熱費、食費、被服費など生活の基礎的条件を節約している様子がみられた。このような経済的な不安定が「香典を出せないこと」や「お年玉をあげられないこと」につながり、家族や地域との関係が疎遠になっている人がみられた。実際に、社会関係を示す指標では、「家族・親族の誰ともほとんど行き来がない」、「緊急時の支援者がいない」、「正月三が日をひとりで過ごした」という回答が一定数みられ、親族とのつながりの弱さが示された。しかし、その中で、「日常生活で困ったことがあったときに手伝ってもらう人がいない」は少なかった。この手伝ってもらう相手として「生活と健康を守る会」の支援者、ケースワーカー、ヘルパーが挙げられていた。このように生活保護や介護保険など制度とのつながりが社会とのつながりになっている面もみられた。

また、このような厳しい生活状況の中、老齢加算の復活を求める声がある一方で、「（保護を受けているので）自分たちはそんなこと（老齢加算の復活）を言える立場にはない」と言う回答もみられた。

今回みてきたように、16,680円という老齢加算が復活をすれば、70歳以上の高齢者の生活にとって、満足のいくものになるかどうかは、本報告だけでは実証できるものではない。ただ、金銭的な制約を感じて多くの人が行動をしていて、それによる様々な制約が「孤立」を強めることになっていた。生活保護を受給せず、同様のもしくはより厳しい生活を強いられている人がいることは事実としてあり、そのような人から見れば、老齢加算の復活は共感が得られるものではないこともわかる。しかし、みんなで我慢をすれば解決するものでもない。人々にとって「当たり前の生活」とは何か、国民の合意の得られる「ナショナルミニマム」の実現に向けて、生活構造を主体的に検討していくことが重要である。

## 謝辞

本調査は多くの人々の協力によっている。調査員として参加した「新潟生活と健康を守る会」の役員と支援者の皆様、静岡県立大学短期大学部社会福祉学科中澤秀一氏、岩手県立大学社会福祉学部宮寺良光氏、新潟県立大学国際地域学部福本圭介氏、新潟県立大学子ども学科2年生伊藤可奈恵さん、木村美香さん、野瀬恵実さん、新潟大学経済学部4年生渡邊樹里さんに感謝したい。

そして何よりも調査に応じてくださった「新潟生活と健康を守る会」の会員の方々に深くお礼を申し上げたい。

## 参考文献

- 岩崎正則・葭原明弘・村松芳多子・渡邊令子・宮崎秀夫 (2010) 「高齢者における咀嚼回数と食品群別摂取量および栄養素等摂取量との関連」『口腔衛生会誌』60
- 岩崎正則・葭原明弘・村松芳多子・渡邊令子・宮崎秀夫 (2010) 「簡易自己式食事履歴質問票BDHQによる80歳高齢者の食べる速さと栄養素等摂取状況との関連」60
- 岩田正美・岩永理恵・鳥山まどか・松本一郎・村上英吾 (2010) 「『流動社会』における生活最低限の実証的研究—若年単身者の家計と生活状況調査による検討—」『貧困研究』Vol.4
- 岩田正美・岩永理恵・鳥山まどか・松本一郎・村上英吾 (2010) 「『流動社会』における生活最低限の実証的研究2—高齢世帯と母子世帯の家計状況の報告—」『貧困研究』Vol.5。
- 金澤誠一 (2010) 「日本の貧困と『最低生計費』—労働者の実態から見えてくるもの—」『経済』No.173.
- 金澤誠一 (2010) 「現代のナショナル・ミニマムと『最低生計費』」『労働総研クォーター』No.76・77
- 河合克義 (1993) 「都市における貧困・低所得層の生活と地域—横浜市鶴見生活と健康を守る会会員生活実態調査報告—」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』23号。
- 河合克義 (1995) 「都市における貧困・低所得層の生活と地域 (その2)」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』25号。
- 河合克義 (2009) 『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律出版社。
- 黒岩亮子 (2010) 「都市高齢者の『孤立』と地域福祉の課題」『貧困研究』Vol.4。

新潟市におけるひとり暮らし高齢者の生活の基本的特徴について－生活保護受給世帯の調査から－

厚生労働省（2009）『日本人の食事摂取基準〔2010年版〕』第一出版。

首都圏最低生計費調査作業チーム（2008）『首都圏最低生計費試算調査報告集』。

静岡労研（2010）『静岡県最低生計費試算調査』。

東北地方最低生計費調査作業チーム（2010）『東北地方最低生計費試算調査報告集』。